≪個人研究発表≫
第１会場（L タイプ）

晩期シェリングにおける「宗教社会主義」の萌芽
――『神話の哲学への歴史的序論』第 23 講義の読解と注釈――

中村徳仁（京都大学人間・環境学研究科 D2）

いまからちょうど 100 年前、20 世紀最大の神学者であるパウル・ティリッヒ（1886～1965 年）は、第一次世界大戦後の荒廃からドイツが立ち直るための方途として、キリスト教と社会主義の積極的な結びつきを模索していた。それまでキリスト教をはじめとした宗教は、社会主義やマルクス主義においては「虚偽意識」とみなされ批判されてきたが、ティリッヒはむしろ、宗教のなかに社会変革のポテンシャルを見て取ったのである。

このような構想にたいしてティリッヒが「宗教社会主義」という名前をあたえたことは知られている。そのティリッヒが度々依拠する思想家としてＦ・Ｗ・Ｊ・シェリング（1775～1854 年）の名前が挙げられる。本発表の目的は、晩年のシェリングが展開した思想のなかに、20 世紀に展開される「宗教社会主義」の萌芽を見いだすことにある。

シェリングはこれまで、ヘーゲルたちとともにフランス革命を奉じた「初期」の自由主義者から転じて、「後期」には君主制の擁護や反革命の立場に至ったとして、ながらく転向図式で語られることが多かった。なかでもルカーチの『理性の破壊』は（とりわけ後期の）シェリングの思想を、ヒットラーにまでいたるドイツ非合理主義の始まりであるとして厳しく批判している。こうした背景もあって、シェリングは「宗教社会主義」はおろか、「社会主義」との関係でも研究史上それほど取り上げられてはこなかった。ところが、晩年のシェリングが遺した政治論をみてみると、そうした整理だけではとらえられない要素もあることはたしかである。こうした理由から本発表は、晩年の唯一まとまった政治論が展開されている『神話の哲学への歴史的序論』の「第 23 講義」を検討する。

そこでは、初期の頃からかわらず、国家は歴史的に乗り越えられるべき対象だと規定されている。しかし、ここで重要なのは、初期からの「一貫性」だけではなく、そこからのさらなる「展開」である。シェリングはこの「第 23 講義」においてあらたに、国家を牽制する別の高次の共同体に「社会（Gesellschaft）」という名前をあてている。本発表では、この「社会」が晩期シェリングの哲学体系のなかで占める位置を確認することで、「宗教社会主義」と近接する側面があることを指摘する。なかでも取り上げるのは、「社会」が到来するときに実現されるものとみなされている「哲学的宗教」という後期シェリングのキーワードである。